

7月20日（金）一学期終業式

「夏だ、そうだ！本を読もう！！」

「夏」から連想するものは何ですか。30秒でできるだけたくさん連想するものを挙げてください。では、よいスタート。いくつ挙げることができましたか。連想できた数はいかに日常生活の中で様々なことに興味や関心を持って生活しているか、あるいはこれまでにどんな経験をしてきたかで違うのではないかと思います。私たちはほぼ毎日変わらない生活習慣というものを持っています。朝起きて、学校に来て、授業を受けて、部活動をして、帰って勉強して寝る。安定的な生活を送るためには自分なりの生活習慣を確立することはとても大事です。しかし一方で、ルーティンな生活は新しい経験をしたりとか、新しい人間関係を築く機会は少なく、皆さんは狭い世界の中で生きてしまうこととなります。これから社会は大きく変わっていきます。私たち大人が経験したことがない時代を生きて行くことになるかもしれません。10～20年後には、今人間がやっている仕事の半分はAIやロボットがやるようになり、今、存在していない仕事が新たに創出されてくる時代です。これからの時代を生きるみんなに必要なもの、それは「想像力と創造力」、英語で言えば“imagination”と“creativity”です。なぜならば、この力は人間にしか持てない力だと思うからです。では、imagination”と“creativity”をつけるために何が必要か。私たちがもっとimagination”と“creativity”の翼を広げるためには何をしなければいけないのか。それは、いつもと違う経験を沢山することだと思います。間もなくオーストラリアに研修に出かける人、学習合宿や部活動の合宿に参加する人、地域のお祭りなどのイベントに参加する人、家の手伝いをする人などもいるかもしれません。そのように日常とは違う経験をするには、“imagination”と“creativity”を磨くためには極めて有効です。何も知識や経験がないところから、“imagination”と“creativity”は生まれません。すなわち「無」から「有」は生じないのです。ここであるクラシック音楽を聞いてみましょう。どこかで聞いたことがあるのではないかと思います。モーツアルトのトルコ行進曲です。モーツアルトはオーストリアのザルツブルク出身です。では、どこでトルコ行進曲の着想を得たのか。モーツアルトはザルツブルクからウィーンに移り、そこでオスマン帝国時代のトルコ軍の音楽に触れたと言われています。何も無いところからトルコ行進曲を作曲したわけではありません。トルコ軍の軍楽に触れるという経験をしたからこそ、そこから着想を得てモーツアルトはトルコ行進曲を作曲できたのです。

しかし、毎日毎日、様々な体験をできる訳ではありません。では、日常のルーティンな生活の中で“imagination”と“creativity”をつけることはできるのか。答えは

「できる」です。自分の家においても、教室においても新しい世界に行くことができる方法が一つあります。時間や空間を超えることもできます。すなわち過去にも未来にも行けるし、全く想像の世界へも、また外国へも行くことができます。私たちは自分ではない存在にもなれます。どうすればいいか。それは本を読むことです。本を読まない人は、知識や教養に乏しく、感性が育まれにくいので、意識を自分の内側から全く外に出られないままに閉じ込めているようなものです。江戸時代、庶民の教養の高さや識字率は世界一だったと言われています。普通の町民が本を読んでいる姿を見て、こんな教養のある国民がいる国は植民地にすることはできないと、当時の外国人は思ったとも言われています。長い鎖国政策で日本は世界的な産業革命から遅れをとったにもかかわらず、明治になり一気に世界に追いついたのは、日本人の教養の高さがあったからです。日本で初めてノーベル物理学賞を取った湯川秀樹博士は、若手の科学者たちにこう言っています。「君たちが一流の科学者になりたいならば、もっと小説を読みなさい。」小説はフィクション、創作です。現実にはあり得ないことが小説の世界にはあります。想像の世界が広がることで、“imagination” や “creativity” が生まれるということを伝えたいのだらうと思います。

また、ドイツのオストワルトという学者は、世界の成功者に共通するものは何なのかを調べ、共通するものが二つあったと言っています。それは、成功者は皆、プラス思考であったことと、大変な読書家であったということです。皆さんが常に携帯すべきはスマホや携帯ではありません。学生カバンには常に文庫本を入れておいて欲しいと思います。Iphone の発明者であるスティーブジョブズは自分の子供にはiphoneを持たせていません。それは、想像力が欠如するという理由からです。

最後に、芥川賞作家の井上靖さんが「無形遺産三つ」という随筆の一部を紹介して話を終わりたいと思います。

「無形遺産三つ」

私は自分の子供たちに、自分が他人からもらい、自分の一生を支配したものを、遺産として与えたいと思う。言うまでもなく無形の遺産である。財産とか土地とかは、いつ失くなるかわからないもので、何の頼りにもならないが、そこへゆくと、無形遺産の方は、使い方によっては、そこから無限に素晴らしいものを引き出すことができる。

(中略)

子供たちに与えたい遺産の第三は、読書の楽しさである。読書の楽しさを知ることと、知らないことでは、人間の一生がまるで違ったものになる。お花畑を歩くのと、砂漠の中を歩くぐらいの差異はある。書物を読む楽しさだけはどんなことをしても知って貰わなくては困る。あるいは無形遺産の中で最大のものかもしれない。日本の歴史を知るにも書物による以外にないし、人生がいかなるものかを知るにも、書物以外のものは何も正しくは教えてくれない。